

見つけたのは

小さな光、

誰にも

渡せない。

厳しい冬と静寂のスイス。

愛を求める異邦人の心が

切なく胸をうつ

感動の名作。

ローズヒルの女

映像詩人アラン・タネール最新作

La Femme de Rose Hill

マリー・カイデュ/ジャン・フィリップ・エコフェ/ドゥニース・ペロン/ロジャー・ジェンドリー ● 監督・脚本アラン・タネール/撮影ユグ・ソフェル/製作アラン・タネール・パウロ・ブランコ/製作総指揮ジャン・ルイ・ボルシェ&ジェラルド・ルイ (CABプロダクション)
1988年/フランス・スイス/カラー/スコープサイズ/1時間35分/配給株式会社セゾン

Filmprint SA * Centre Film 4219



●解説

ダニエル・シュミットや、今や世界的撮影監督となったレナート・ベルタらと共に、'70年代にスイス映画を世界的レベルに引き上げた「スイス映画の父」アラン・タネール。『ローズヒルの女』は、今なお瑞々しい感性を失わないタネールの長篇12作目。

製作にあたって「ひとつのイメージから全てが始まった」という監督の原イメージとは、白い雪原に佇む黒人女性の姿だったという。このたったひとつの詩的映像から、この作品の愛の悲劇は紡ぎ出された。

舞台はスイスのジュネーヴに隣接するヴォー州の田舎。雪深く厳しい冬を静寂の中で過ごす寒村。そこに住む農夫マルセルの許へモリシャス島の「ローズヒル」から一人の黒人娘が嫁いで来るところから物語は始まる。

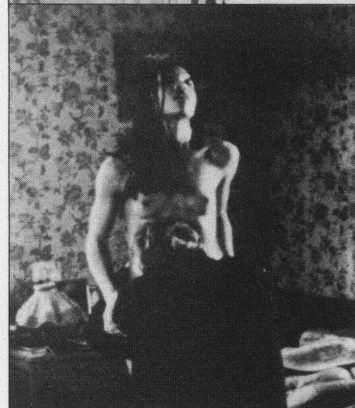
自国スイスにいても自分を異邦人と感じるというタネールは、デビュー作『どうなってもシャルル』('69)から、近年の代表作『白い町にて』('83)、立て続けに公開された『わが心の炎』('87)、『幻の女』('87)に至るまで、旅に出て自ら異邦人となるテーマを扱った作品が多い。アイデンティティの希薄な、そしてだからこそ必死で自己を発見しようとする者たちの孤独感、夢や欲望、危機感、それを異郷の心象風景としてフィルムに定着させる手腕において、タネールの右に出る者はいない。この作品でも見果てぬ夢を抱いて皮肉にも閉ざされた世界へ辿り着いてしまうヒロイン、ジュリーの、夫にも環境にも馴染めない孤独な心の震えが寂寥としたヴォー州の風景に映えて哀しい詩情を醸し出している。そして新たな恋を弾みとして小さな希望を見出し、自らの存在理由を発見していくジュリーの姿は切なく観客の胸をうつ。

ジュリー役のマリー・ガイデュは西インド諸島のグアドループ島に生まれ、パリで育った新人女優。運命的に出会い、短かい愛の蜜月を過ごすことになる恋人役ジャンには、昨今めきめきと頭角を現わしてきた注目の俳優ジャン＝フィリップ・エコフェ。彼は同じタネール監督の『ノー・マンズ・ランド』('85)でデビューして以来の抜擢で、物語を悲劇へと導く破滅的人物を魅力的に演じている。



●ストーリー

遠くインド洋の島からスイスの寒村に美しい黒人娘ジュリーがやって来た。彼女は結婚紹介所の仲介で農夫マルセルの許へ嫁いで来たのだ。しかし、凍てつく長い冬に閉じ込められたような夫と義母との暮らしにジュリーは馴染めない。次第に気詰まりになっていく人間関係に耐え切れなくなったジュリーは何度か家を飛び出し、ある日、工場主の息子ジャンに出会う。彼の親切に、やがて頑なな心をほぐしていくジュリー。そして「島を出たかったからマルセルと結婚したの。いい人だけど好きになれない」と孤独な胸の内を打ち明け、二人は結ばれる。ジャンは村の噂から逃れるため、変わり者の伯母ジャンヌの家にジュリーを住まわせる。足の悪いジャンヌの世話も楽しく、夜はジャンと激しく愛し合う蜜月の日々。だが、ジュリーの妊娠が周囲に波紋を投げかけた。堕胎を勧めるジャンを彼女は激しく非難し、やがて決意通り無事に男の子を出産した。やっと見つけた小さな光。しかし彼女の運命には非情な罫が仕掛けられていた…。



'91年1月上旬より新春ロードショー

特別鑑賞券1,300円好評発売中

当日一般1,600円 学生1,300円(税込)

特別鑑賞券は都内各プレイガイド、チケット・セゾン、チケットぴあ、セゾン系各劇場にてお求め下さい。

※初日12:30の回に来場の方にもれなく「ローズヒルの女」特製ポストカードプレゼント。

連 日				④のみ夜9:10
12:30	2:40	4:50	7:00	

●自由席定員制・入替制

CINE VIVANT

シネ・ヴィヴァン・六本木

地下鉄六本木駅下車1番出口WAVE地下1階
お問い合わせ ☎03(403)6061